

■ 白の階調2016 -レリーフと版による表現-

■ White Gradation 2016 -Relief and Print-

趙慶姫

CHO Kyong Hee

青山学院女子短期大学 現代教養学科

Department of Contemporary Liberal Arts, Aoyama Gakuin Women's Junior College

光、陰影、次元

light, shade, dimension

光の存在の意識化をテーマに、レリーフ「白の階調」シリーズとして、光がつくり出す柔らかで微妙な陰影による造形表現を行っている。一方、版画制作を並行しており、近年はその二つの異なる表現方法を用いて、立体と平面という異なる次元を視角的に行き来する試みを行っている。

1.レリーフの造形手法の変化

「白の階調」シリーズは、2006年に紙のエンボス加工から始まり、2009年から2013年までは石膏を用いて、その加工特性・質感を活かした表現を行ってきた。しかし石膏の型取り・流し込みという技法ゆえ、制作に伴う廃棄物の量が多くなることに対するジレンマが大きくなってきていた。

そこで2014年から石膏に代わる新たな造形手法の研究に取り組み、木製パネルのベースに木材、MDFで造形し、ジェツソを塗装するという方法を採用している。形状の制約、質感の差異など、石膏に適わない面もあるが、軽量化、制作環境の自由度などメリットも多い。B全水張りパネルを用いるのは、実は勤務先の大学の改組、カリキュラム変更によって生じた不要品の再利用にもなっている。

2.版画の技法と表現

版画では、「黒の階調」とも言える微妙なトーンをつくり出すことに関心があり、エッチング、ドライポイント、メゾチントなどの技法に取り組んでいる。中でもエッチングは銅板と腐蝕液の状態、腐蝕時間といった要因により変化するため、コントロールが難しい分、版画ならではの魅力を感じる。繊細な表現だけでなく、長時間腐蝕するディープエッチングでは、ラフな、偶然性を活かした表現も可能である。

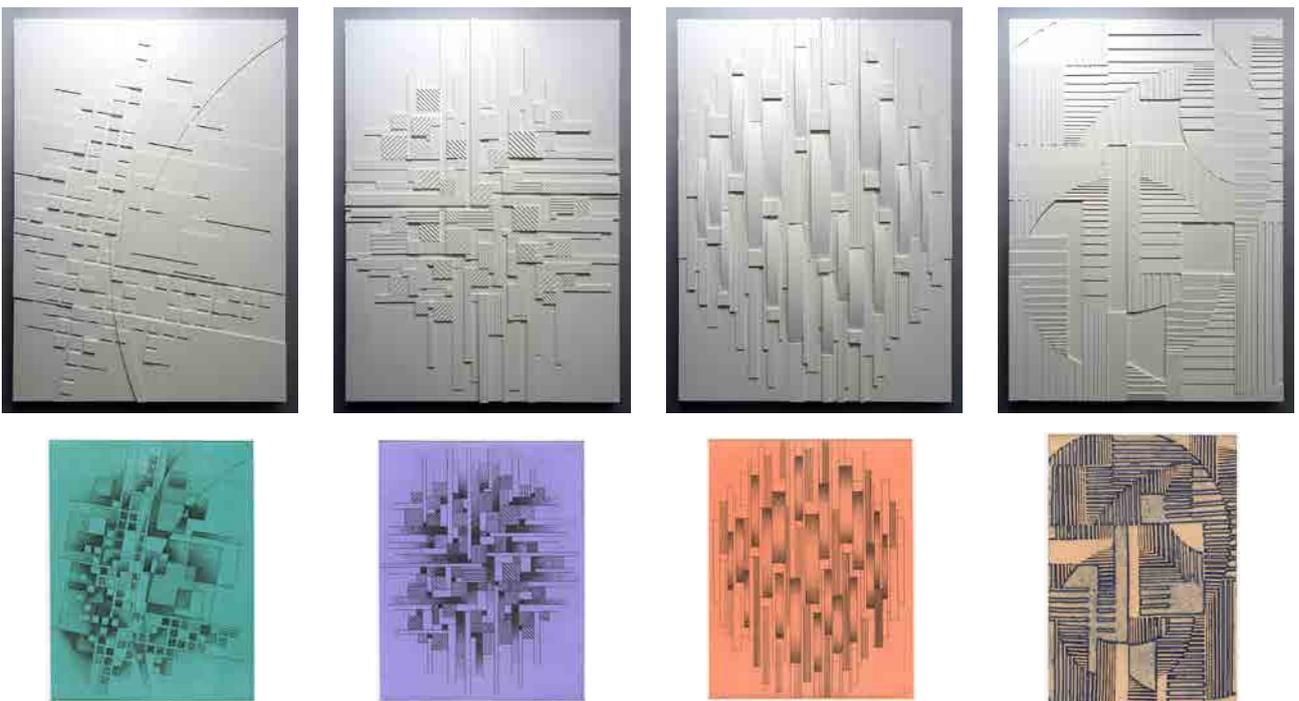
3.二つの表現、二つの次元

2013年9月の個展で、同じ構図でレリーフ(立体)と版画(平面)の二つの作品を対比させる展示を行い、どちらも建築空間への展開を視野に入れ、複製の可能なユニットで構成する作品として発表した。この時はあらかじめ対比させるという展示計画から、先にレリーフの構図を考え、その凹凸から生じる陰影をに二次元化し版画で表現するという試みだった。

それまでの版画制作は特にテーマを持たずに進めていたが、この発表によって、版画においても陰影や透明感といった「光」を表現することに関心を強め、同一のイメージを二つの表現方法で展開する研究を続けることにした。その後、レリーフにおいては先に述べたように素材・技法を変え、造形の可能性を探ることになり、その過程では、並行する版画制作で先に陰影のイメージを作ったり、レリーフを作ったあとに版画の版に加筆して明暗の調子を強めたりと、二つの表現方法、立体と平面の二つの次元を行き来しながら制作を進めた。

今年4月に行った2人展ではこの研究の発表として、レリーフ5点と版画5点を展示し、来場者から、どちらが先かという質問をよく受けた。普段の研究では版画の方にあてる時間が多いため、どちらかというとなら版画が先になることも多いが、その逆もあり、常にどちらかが先ということではなかった。

レリーフ自体が立体といっても、二次元と三次元の間位置すると言え、平面のイメージに奥行きを与えていく表現である。初めにあるこのイメージから立ち上がり、微かな奥行きだがリアルな三次元空間をつくり、光をとらえるレリーフと、平面の中に留まりながらも明暗の調子で空間を表現し、光を感じさせる版画。その二つを対比させることで、視覚表現の可能性を探りながら、光の存在の意識化という研究を進めている。



上段:レリーフ(130Hx73Wx4Dcm/木) 下段左から3点:版画(エッチング/16Hx12.5Wcm) 下段右端:版画(ディープエッチング/22.6Hx15.5Wcm)